

2019年4月28日(日)／説教者：国分美生

説教：「神ならざるものを神としない」

聖書：コリントの信徒への手紙ー10:1～13

「神は乗り越えられないような試練は与えない」と書かれていると認識されてきた、この聖書箇所。原典から鑑みても「試練にあったままにはさせず」という意味で読む方が、パウロの言わんとすることがわかります。人間が試練に遭うかどうかを神が決めてコントロールするのはありません。神は私たちが試練に遭っているままにはしておかない、というのです。13節の「逃れの道」は原典では「出口」・「脱出の道」という意味。神は人間に対して試練を与えたりなどなさらず、ただ「出口」「脱出の道」をくださる方なのです。

パウロが言っている「試練」とは何のことでしょうか。原典に沿い、またこの前後に書かれていることを見ると「試練」は、本来「誘惑」と訳すと意味が分かります。パウロはこの手紙の中で偶像礼拝への誘惑に対しての言及をしています。コリント教会のメンバーの中で、異教の神々の神殿における食事や祭りに出席していた者がいました。異教徒から改宗してキリスト者になったという人々が数多くいたからです。パウロは、偶像礼拝に参加することはキリストを試みること、主の妬みを起こさせるものであると警告しています。

キリスト教に無関係な文化や習慣は私たちの周りにたくさんあります。お正月や初詣、お盆、ハロウィン、成人式等々…沖縄独特のものであれば、シーミーや、ノロやカミンチュ。日常生活の中で宗教的な文化や習慣が深く根付いています。それらも偶像礼拝でしょうか。

14節以下でパウロは、偶像礼拝がなぜ問題なのかを語ります。主の晩餐でパンと杯をいただくことはイエス・キリストとの交わりである。あなた方は主の杯を飲み、そのうえさらに悪霊の杯を飲むことはできないのだ…そこから今私たちの身に迫ってくるメッセージは私たちの生活にすっかりなじんでいる宗教的な文化や習慣のあれやこれやを問題視することではありません。問題なのはもっと決定的な、神ならざる者の存在。神ではないのに神であるかのように私たちに忠誠と犠牲を強制する存在。ローマ社会においてはローマ皇帝。日本においては天皇です。

もし天皇制がなかったならば沖縄の歴史はまったく違っていました。人としての尊厳や、権利や命がまもられる社会になっていたはずです。人間である天皇を神としたことで天皇以外の命、つまり国の主役である国民の尊い命が軽んじられてきた歴史はいまでも続いています。教会は誘惑からの脱出を用意してくださる神に信頼して、神ならざる者の支配に対する警鐘を鳴らしていく働きをゆだねられています。(国分美生)